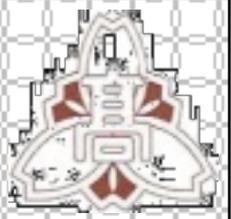


安来高新聞



発行所：安来高校新聞部
〒692-0031
島根県安来市佐久保町115
TEL：(0854)22-2840
FAX：(0854)22-3612

五感で楽しむ文化祭

11月3日(土)の文化の日
に文化祭が行われた。

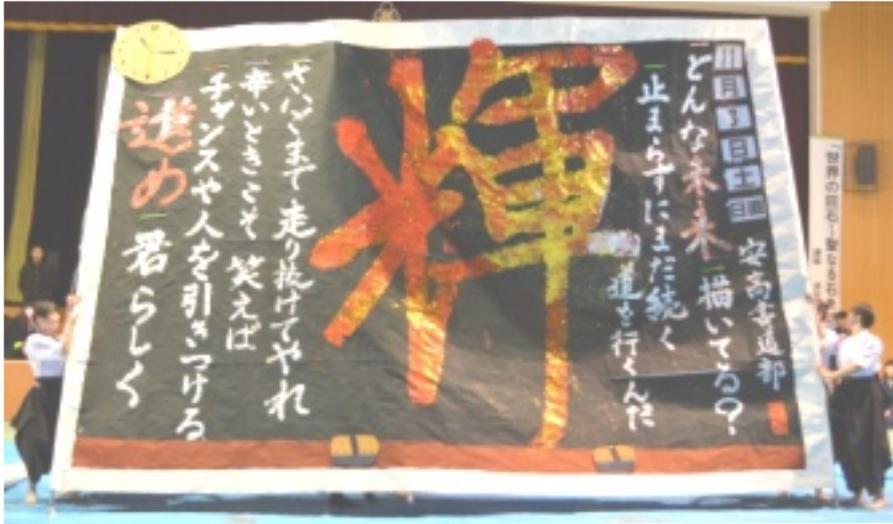
今回は各文化部や委員会による作品展示、吹奏楽部、弦楽部による演奏に加え、美術部によるボディペイントなど見学者が実際に体験できるコーナーも設置され、五感で楽し

める文化祭となった。また、生徒会企画では昨年好評だった未成年の主張と仮装パレードが行われた。
午前の部の終盤には書道部による書道パフォーマンスが披露され、自信に満ち溢れた様子で力強く披露する姿に会場が魅了された。今年は紙

の背景を黒板風にしたり、観客にペンライトで照らしてもらいながらパフォーマンスをするなど新たな試みも見られた。終了後、部長の秋本実穂さん(2年)は「程よい緊張感のなかで披露できた。準備期間が少な

くて大変だったが、全校生徒のみなさんに楽しんでよかったです」と笑顔で話した。
午後の部は吹奏楽部の発表で始まった。吹奏楽ならではの曲から最近のはやりの曲まで披露し、観客を最後まで飽きさせないステージ発表となった。米津玄師の「Lemon」を披露した際には、5名の先生が演奏者として参加したり、パレード部の吉川拓馬さん(2年)がボーカルで参加するなどコラボ企画が行われた。

閉会式のエンディングでは、野球部員6人によって結成されたギンギン&プリプリが歌を披露し、会場を熱気で包んだ。ギンプリのメンバーとしても生徒会長としても今回の文化祭に携わった細田健生さん(2年)は今回の文化祭を振り返り、「前日のリハーサルを終えるまで流れが掴めていなくて大変だったけど、活気あふれる文化祭になってよかった」と話した。(亜)



迫力満点の完成作品

期間が少なくて大変だったが、全校生徒のみなさんに楽しんでよかったです」

文化祭の舞台裏では



大量の印刷物と格闘する執行部

文化祭前日、昼休みも返上で生徒会室にこもり、パンフレット作りに励む生徒会執行部の姿があった。新執行部にとって初めての大きな行事で、準備にも時間がかかった。特にオープニングやエンディングはなかなか方針が定まらず、苦労した。最終的にエンディングは女子ソフトテニス部のオタクの仮装に合わせて考えられた。
前日の入念なリハーサルは夜9時ごろまで続いた。(亜)



仮装を楽しむ生徒たち

文化祭前日、昼休みも返上で生徒会室にこもり、パンフレット作りに励む生徒会執行部の姿があった。新執行部にとって初めての大きな行事で、準備にも時間がかかった。特にオープニングやエンディングはなかなか方針が定まらず、苦労した。最終的にエンディングは女子ソフトテニス部のオタクの仮装に合わせて考えられた。
前日の入念なリハーサルは夜9時ごろまで続いた。(亜)

佐久保発

身近に潜む危険物
高校生ならばほとんどの人が持っているであろうスマートフォン。私は中学卒業後、父に買ってもらった。わからないことがあれば、数学の公式に古文の単語、地図で現在地まで把握することができ。方向音痴な私にとってまさに神器といっても過言ではない。しかし、同時に私から様々なものを奪っていった。例えば視力。私は高校入学時、両目とも視力はAだった。しかし二年の夏頃から遠くの細かな字が見えなくなってきた▼私生活のすべてに影響が及ぶというわけではないが、やはり不便なもので、しぶしぶ眼鏡を親に買ってもらった▼なぜ目が悪くなったのか。それは私自身に原因がある。暗い部屋でスマホを見ていたり、画面を長時間もぶつ通しで見続けていたりなどと、すべてが目負担をかけるものであった。そしてさらに私から時間までも奪った。視力は回復させることが可能ではあるが、時間には手元に戻ってくることはない▼スマホはとても便利で楽しいものではあるが、使い方を誤ればとても危険な凶器へと様変わりしてしまうのだ。ドラッグのように依存性もある。今以上にスマホの存在を「悪」にしないためにも、使う時の決め事を作らなければならないと思う。(花)

文化講演会

記者の取材に答える須田さん



石に導かれた男

文化祭の講演では、出雲市在住の巨石ハンターこと須田郡司さん（56）が自身の体験談を踏まえ日本の巨石だけでなく、海外の巨石についても多くの美しい写真を見せながら語った。

須田さんは聖なる石を撮るために石巡礼をし、その時に味わった感動を伝えるため各地で講演会を行っている。長い年月をかけて日本全国の1000箇所以上のスポットをまわり、海外のスポットにも訪れた。地域の人とコミュニケーションを取り、地域の人だからこそ知っているパンフレットには載っていないような巨石のありかを教えてもらいながら旅をした。

講演後の生徒の質問にあった「お気に入りのスポットは？」への返答であった、チベットにあるカイラス山は、アジアの宗教（仏教、ヒンドウ教、ボン教、ジャイナ教）の聖地

であり、須田さんは、カイラス山へ訪れた時、我知らず涙が出た。そしてこの山が、重要な場所なのだ実感したそう。そんな須田さんは現在、出雲に在住しながら島根大学に通っている。法文学部の人文社会科学研究科で文化人類学を学び、専門的な知識を磨いている。卒業後には、さらに別の大学で学ぶことも考えており、須田さんの知的好奇心は留まるどころを知らない。そして海外でも

もっと巨石について発表していきたいと夢を語った。

（花）



初の試み 美術と音楽のコラボ授業

「間」を愛する日本人

一年生の美術選択者と音楽選択者とが共同で授業を受けた。学びのテーマは「間」。美術の玉井美穂子教諭と音楽の広戸茉莉教諭との対話の中から生まれたアイデアだという。

バラバラに切り離され、ティチェリの「ヴィーパズルのピース」となった二枚の絵、一枚は俵屋宗達の「風神雷神図屏風」、もう一枚はポッ

ナス誕生」。二枚の絵のピースが混ざり合ったものを生徒たちはわけながら絵を復元する



相談しながら能面を年齢順に並べ替える生徒たち

作業に取り掛かった。袋を開けるなり「日本と西洋に分けよう」と発言する生徒がおり、玉井教諭はその言葉をすかさず拾い上げ、なぜその二種類があると思ったのかと問いかける。「色が渋いから」「見たことのある絵だったから」などと答える生徒らに、他の絵も見せながら、何も描かない部分があり、そこから何かを感じ取らせるのが日本的な技法なのだ気付かせた。

また、平安時代に生まれたといわれる、安珍・清姫伝説を学んだ後、その後日談である「能」の「道成寺」をビデオ鑑賞した。安珍という僧侶を恋するあまり、蛇と化し彼を焼き尽くしてしまつた清姫。「能」では清姫が再び寺を訪ねるところから始まる。清姫のかすかな動きとはうらはらに囃子方（バックバンド）の「ヨー」という声と「ポン」という鼓の音が緊迫感をかもし出す。声と音との長い間合いが次第に短くなっていくことに注

目させた広戸教諭はそこから何を感じ取るかと問いかけた。「感情の高ぶりを感じた」「女が泣き叫びたいのをこらえているように感じた」といった感想が生徒からあがった。全五回にわたった今回の授業を受けて、日野葉月さんは「（能は）ステージにいる人と観る人がそろうって初めて成立するところ、100パーセント表現して伝えるのではなく、想像でストーリーが完成するので個々で思うことが違うところが面白い。日本独特のものだと思つた」と初めてじっくり能にふれた感想を語った。

授業を終えた広戸教諭は「美術、音楽と違うジャンルでも同じ美意識や視点で味わうことに気付いてくれただろう」と振り返り、「『間』や『余白』は何もないからこそ、豊かに心で感じ取ることができる。音や情報が溢れすぎた時代こそ静寂や余白の良さが付いてほしい」と、今回の授業に込めた思いを語った。

秋晴れの空の下 青春を駆ける



気合たっぷりのスタート!

ロードレース 力走416名
10月24日(水)に毎年恒例の校内ロードレース大会が行われた。

分教室の生徒を含む全校生徒416名が、男子17キロ、女子12キロという長距離の完走を目指して懸命に走った。少し肌寒く感じる中始まったが、次第に気温は上がっていき、走っていると暑さを感じ始めるほどであった。前日の雨の影響で地面がぬかるみ、一部コースが変更される場所もあった。完走後には、保護者のボランティアが丹精込めて

熱々の豚汁「いただきます！」



炊き出した豚汁で汗を冷やして冷えた体を温めていた。女子の部では上位2名の選手による激しい争いが繰り広げられ、ゴール直前まで勝負の行方は分からなかった。結果、1位と2位の差はわずか2秒であった。ゴール後

には、1位の選手が倒れこむ様子も見られ、白熱したレースだったことがうかがえる。1位の喜佐田紗有里さん(2年)は「去年は2位で悔しかったので、今年は絶対優勝しようという気持ちで走った。来年は、去年の女バ

レの先輩のタイムを超えられるように頑張りたい」と喜びに満ちた様子で話した。男子1位の仲佐蒼太さん(2年)は「1位になれて嬉しい。来年は連覇を目指したい」と満面の笑みを浮かべながら話した。また、保護者として

豚汁の炊き出しに参加した安部奈美さん(45)は「野菜は切り方を工夫し、柔らかくなるように下茹でもした。疲れた子供たちにおいしいと言ってもらいたいという思いで一生懸命作った」と語った。(亜)

安高を輝かせる源

生徒会長決定!



9月11日(火)7時間目、安来高校の生徒会長を決める立会演説会が行われた。生徒会長には2年3組の細田健生さんが立候補した。演説は迫力があり、生徒たちを夢中にさせ、見事多数の票を獲得し、当選した。細田さんは「立

候補した理由は、ある人に誘われたから。中学のころには生徒会長のような仕事の経験がなく迷ったが、逃げずに立候補した。執行部のメンバーが決まった時、男子は自分一人で不安だったが、みんなが頑張ってくれて、ちよつとずつまとまってきた良かった」と語った。細田さん自身の性格を聞いたところ「人のことを考えながら話をする事ができる。ただ、やることを計画しても実行できないこ

ともあったので、これからはやる気を出しながら実行する事を心がけたいと思う。そして地域から愛される学校にしたい」と語った。生徒会が新体制になってから一か月が過ぎ、細田さんは時間を見ながら行動するようになったと早速自身に変化が起きているようだ。そんな細田さんは1946年にノーベル文学賞を受賞したヘルマン・ヘッセの「君がどんなに遠い夢を見たとしても 君自身が可能性を信じる限りそれは手の届くところにある」という言葉を意識しながら日々生活しているそうだ。(花)

上位入賞者(学年 部活動)

順位	女子	男子
1位	喜佐田紗有里(2年バレー部)	仲佐蒼太(2年バレー部)
2位	宮本季代(2年バスケット部)	加藤瑛大(1年バスケット部)
3位	今井鈴(1年バスケット部)	伊藤颯大(2年野球部)
4位	二岡希莉(1年バレー部)	川角純平(3年バレー部)
5位	原萌々子(1年バスケット部)	大江優駿(1年野球部)
6位	藤原優月(1年フェンシング部)	平井元汰(2年バレー部)
7位	米村嘉織(2年バレー部)	金川哲大(1年テニス部)
8位	厚田知香(2年バレー部)	神原康太(2年バレー部)
9位	金光くらら(1年バスケット部)	仲佐駿介(2年バレー部)
10位	山根莉央(2年バレー部)	小林陸椰(2年野球部)

地下壕マル秘計画

地元生徒が語る戦争

松代大本営(まっしるだいほんえい)って??

松代大本営 地下壕は、第二次世界大戦末期、本土決戦に備えた最終軍事拠点として1944年11月〜45年8月の終戦まで長野県松代市に建設された人工地下トンネルで、約8割が完成していた。9ヶ月ほどの建設期間ではあったが、全長は約10キロにも及ぶ。建設には、当時の金額で

約1〜2億円の費用が投じられ、日本人だけではなく、朝鮮人も従事した。朝鮮人の労働については、強制的に過酷な労働

を強いられたという説や、賃金が良かったため積極的に働いたという説など様々な見方がある。建設の地に松代が選ばれた理由としては、岩盤が

戦争の記憶を形に

1990年に一般公開されて以来、世界中から多くの観光客が訪れており、平和な世界を語り継ぐ大切な役割を担っている。

(亜)



手作りの巨大パネルで説明

この夏、本校新聞部員2名は総文祭の研究取材として長野県の松代大本営象山地下壕を訪れた。今回は長野俊英高校郷土研究部の部員たちが取材に協力し、地下壕の紹介をしてくれた。

戦争の裏側に迫る

郷土研究班は、主に地元の地下壕の歴史を研究しており、観光客の案内や取材も受けている。地下壕建築の経緯をわかりやすく伝えるため、自分たちで作った巨大パネルを使い、観光客に説明している。

地下壕は、完成まで残り僅かのところで終戦を迎え中断。大規模に建設が進められた期間は1年もなかったという。建設にはダイナマイトが使用され、その爆発に巻き込まれて命を落とす労働者もた

くさんいたそう。部員の花見瑞樹さん(2年)は、「望んで掘削の労働をしに来ている人もいたとはいえ、軍事基地のために犠牲者が出る作業をさせたのはよくないかと思う。観光客の人には、地下壕での出来事を理解してもらって、戦争の悲惨さをわか

らせた。語った。

廃墟と化した壕の行方!

私たちが新聞部を案内してくれた部員の藤井大地さん(2年)は「自



使命感を持って語る

方と話したり、この地を訪れた人に説明したりなど、人とのコミュニケーションが取れる楽しい部活だ」と述べる。将来、この部活で得た知識で平和をいろいろな人たちに伝えたいと話した。(花)

編集後記

文化祭では文化部が活躍したが、運動部の活躍も見逃せない。この秋行われた県新人戦では、女子ソフトテニス部が団体3位、女子テニス部の細木・細田ペアが準優勝するなど、多くの運動部員たちが中国新人戦への出場を決めている。また、野球部が松江地区1年生大会で優勝するなど輝かしい成績を残した。

2学期は色々なイベントがあったが、実は私は夏休み中に腰を痛め、身体を動かすほどの行事に参加できなかった。来年こそ万全な状態で秋を楽しみたい。

平和でつながる

花見さんは自分たちの部活を、「人との触れ合いが多く、戦争を体験してきた高齢者の